東播の秋祭り独自の神事

「竹割り」じわり浸透中

直立の青竹 何度も地面に

荒々しさ魅力 新規導入の地区も

東播の秋祭りは屋台の練りで知られるが、「竹割り」と呼ばれる独特の神事もある。切り出した長さ10㍍もの青竹の根元を綱で縛り、直立させたまま10人ほどで地面に何度もたたきつける。裂けた竹は生き物のように、のたうち、崩れ落ちる。危険と隣り合わせの荒々しさが魅力で、新たに導入する地区も出てきた。竹を割るときの「竹割り歌」には、歌謡曲の替え歌もある。竹割りは、伝統行事を大切にしつつ、新しさに寛容な祭りの象徴とも言えそうだ。

（東播支社・井上　駿）

竹割りは、曽根天満宮（高砂市）が発祥とされ、秋祭りに登場する稚児「一ツ物」とのつながりが深い。一ツ物は華やかな衣装で馬に乗って練り歩き、宮入りする。その露払いとして、宵宮には長い竹に高張りちょうちんを、本宮ではのぼりを付けて先導する。辻々で地面を竹でたたく。境内では、竹の先にくす玉を付けて割ったり、氏子が竹に登ったりする余興も交え、竹が割れるまで激しく打ち付ける。

高砂市史曽根編（1964年）によると、竹割りは明治中期に始まる。言い伝えでは、竹を立てるとき偶然割れたことがきっかけ。「その様子が昇り竜のようで、めでたい、となった」と氏子総代の大西隆夫さん(71)。「塩田や港で力仕事をする氏子が多く、荒々しさが受け入れられたのかも」と推測する。

◇

稲美町の加古八幡神社の秋祭りでは5年前、竹割りが始まった。地元の五軒屋地区が、生石（おいし）神社（高砂市）の氏子である米田町島地区に獅子舞を伝授する一方、竹割りを教えてもらった。五軒屋地区の黒田夏季さん(31)は「若者の祭り離れを防ぎ、楽しめる祭りにするため取り入れた。見物客も増えている」と話す。

一方、米田天神社（高砂市）では今年、神事としての竹割りはやめた。「練り子の力の消耗が激しく、屋台に力を入れるため」と米田地区青年会の小坂陵太さん(26)。ただ「続けたい」との声もあり、宵宮の神事を終えた後に地域内で行った。

ただし、危険も伴う。曽根天満宮では昨年、割れた竹の直撃を受けた氏子が重傷を負った。

◇

竹割り歌は、地面を固める作業の仕事歌「播州地搗（つ）き唄」が元歌だ。赤面してしまう内容も含め、多様な歌詞がある。歌謡曲を充てるケースもあり、曽根天満宮の氏子の阿弥陀西地区は、松田聖子さんのヒット曲「青い珊瑚礁（さんごしょう）」を歌う。歌詞の「あなたが好き」が「祭りが好き」となる。かつては天地真理さんの「恋する夏の日」もあった。

東播の秋祭りは、屋台を発光ダイオード（LED）の電飾で彩るなど、伝統を守りながら、新たな試みを取り入れる側面がある。竹割りもまた、その一つ。祭りに活気をもたらす「にぎやかし」として受け継がれている。「わしらの屋台が一番」「うちの祭りが最高や」―。そんな誇りが祭りを進化させる。

のたうつように割れる竹。歓声がわき起こる＝10月21日、高砂市阿弥陀町生石、生石神社（撮影・宮沢之祐）

ニュースコンパス 兵庫

地域版から

ジオパークを写真集に

但馬　香美町香住区の男性が山陰海岸ジオパークの写真集を出版。1950年代の生活風景なども紹介

冬テーマの仕掛け絵本

西播　相生の「ゆう風舎」で、サンタクロースやクリスマスツリーを扱った世界の100冊を展示

市民向けに官兵衛紹介

姫路　NHK大河ドラマの放映決定を受け、姫路ゆかりの黒田官兵衛を紹介する講演会が開かれた